

第283回 「インストラクショナルデザインの理論とモデル」輪読

第12章 情意的な発達を促進する

バーバラ・A・ビチェルマイヤー他

- 感情的知能のための普遍的教授原理
 - 課題中心の原理: ストーリを使う
 - 活性化の原理: 感情を表す言葉を教える
 - 例示の原理: 感情的知能のスキルの手本を示す
 - 応用の原理: じっくりと時間をかけて感情に対処する
 - 統合の原理: 活動的で総合的な経験を提供する
- 感情的知能発達のための状況依存原理
 - 学習者の感情発達レベル/内的要因/外的要因
- 結論: 感情的知能のスキル教授の困難性・重要性
修得したスキルを他に転移させて活用することの不確実さ

情意領域とは

- Martin & Briggs, 1986の定義

ブルームの3つの学習領域のうち認知・精神運動領域以外の自己概念、動機付け、興味、態度、信念等一切をまとめた用語

- 本章での取り扱い

情意領域の基本要素の一つである「感情」に焦点を当てる

知能や情緒的発達過程、学習者の感情的知能の発達を支える教育の原理において感情が果たす役割

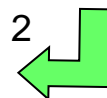
- 背景にある理論

感情と認知の二元論⇒学ぶことと存在することについての統合

感情は合理的思考に不可欠、感情欠落は合理性を阻害 (Damasio, 1994, 2000)

認知的発育への感情の影響 (Greenspan & Benderly, 1997)

感情的知能の5領域の概念定義 (Mayer & Salovey, 1993, 1997)



情意領域の重要性

- 感情は学習の成否に強い影響を与える
「不安に思っている感情が原因で、何を言われているか理解できない・・・」
- 反対意見
ある種の洗脳である
- 感情に関する研究の新たな問い
「教師はどの範囲まで、教室の中で学習者のために感情的知能の発達を促進する授業の取り組みに従事し、その環境を生み出すことができるだろうか？」

第283回 「インストラクショナルデザインの理論とモデル」輪読

第12章 情意的な発達を促進する

バーバラ・A・ビチェルマイヤー他

- 感情的知能のための普遍的教授原理
 - 課題中心の原理: ストーリを使う
 - 活性化の原理: 感情を表す言葉を教える
 - 例示の原理: 感情的知能のスキルの手本を示す
 - 応用の原理: じっくりと時間をかけて感情に対処する
 - 統合の原理: 活動的で総合的な経験を提供する
- 感情的知能発達のための状況依存原理
 - 学習者の感情発達レベル/内的要因/外的要因
- 感情的知能のスキルを教えることの困難性・重要性
 - 修得したスキルを他に転移させて活用することの不確実さ



感情的知能のための普遍的教授原理

課題中心の原理: ストーリーを使う

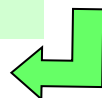
- 「学びは、学習者が現実世界の課題の解決に取り組んだときに促進される」(Merrill,2002)
- 感情は経験の一つであるため、抽象的に教えられたり、学んだりできない
- 現実的な状況は不必要な緊張と不安を生む可能性があるため、個人的にならない導入方法の工夫が必要
- 人々が異なる環境ではどのように感じるか、どのように感じるのが適切なのか、それはなぜか
- 意図的にストーリーの登場人物の感情を探索させること
- ストーリーの中の出来事を子ども自身の人生の中で起こっている実際の出来事に結び付けさせること
- 勉強と実際の生活との結びつきに気づくことで、子どもたちの感情の理解や学習への関心を高め、感情的知能の発達を促進するメッセージの内面化を促進させる



感情的知能のための普遍的教授原理

活性化の原理：感情を表す言葉を教える

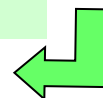
- 「学びは、関連性のある経験が得られたときに促進される」
- 「学びは、新しい知識を組織するために使える構造が提供されたり、それを思い出すことを促されたときに促進される」
- 攻撃的な行動をみせる子ども⇒自分の感情表現のための言葉や概念的構造をもっていないことが多い
- 感情に関する言葉を教える、感情に関する能力の基礎スキルに必要な構造を提供する
- 子どもが自分の経験している感情を自己認識し、表すことができる程度に応じて、感情的な行動は熟考され、検討され、理解されうる
- 子どもが口頭で感情表現ができる程度と感情をうまく扱えているかどうかについての教師による評価は正の相関



感情的知能のための普遍的教授原理

例示の原理：感情的知能のスキルの手本を示す

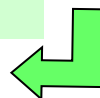
- 「学びは、これから学ぶことについて、単に言葉で説明して情報を与えるよりも、例示することによって促進される」
- 感情的知能の発達を促進する最善の方法は、モデリングを通じた感情的知能の例示
- 教師が適切な感情的行動を具体化して手本を見せる
- 他者とのやりとりの中で肯定的な感情を保つ
- 家庭で感情的行動のよい見本をあたえられていない子どもにとっては限界はある
- 教師が認知的で対人的な意思決定や問題解決を奨励する方法
- 子どもが潜在的に否定的な感情を扱う際は、自信を持たせるような手本を示す
- 教室での経験に、感情を持って参画させる←よりよく学ぶ



感情的知能のための普遍的教授原理

応用の原理:じっくりと時間をかけて感情に対処する

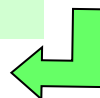
- 「学びは、学習者が問題解決のために新しい知識やスキルを使うことを必要とされるとき促進される」
- 練習において一貫性を保つこと、多様な練習問題を使うこと、学習者が受け取る指導の量を時間をかけて減らしていく
- 与えられた状況で自分の感情を認識する能力とそれらの感情にどのように適切に対応するかを決定する能力が必要
- 感情的反応の妥当性は状況依存であり、感情に関するスキルをある状況から他の状況へ転移させるのは簡単ではない
- 多くの実践経験が必要
- 不適切な態度をとる子どもに感情を言葉で表現を促す
- 語学等の認知的な授業に感情的知能を促進する活動を導入⇒シナリオの中での感情について投げかける



感情的知能のための普遍的教授原理

統合の原理：活動的で総合的な経験を提供する

- 「学習者が新しい知識やスキルを日々の生活に統合することを促されたときに学びが促進される」
- 感情は、感覚の経験であるため、学習者の自発的な参加なくしては理解されない
- 感情的知能の発達には、他の領域の能力開発を促進する教授活動の中に総合的に取り入れることが大切
- 感情は認知と感覚的運動体験に結び付いたものなので、学習者の認知、情意、感覚運動等の領域における発達も、教授活動がすべての領域を対象としているときに最も効果的



第283回 「インストラクショナルデザインの理論とモデル」輪読

第12章 情意的な発達を促進する

バーバラ・A・ビチェルマイヤー他

- 感情的知能のための普遍的教授原理

課題中心の原理: ストーリを使う

活性化の原理: 感情を表す言葉を教える

例示の原理: 感情的知能のスキルの手本を示す

応用の原理: じっくりと時間をかけて感情に対処する

統合の原理: 活動的で総合的な経験を提供する

- 感情的知能発達のための状況依存原理

学習者の感情発達レベル/内的要因/外的要因

- 感情的知能のスキルを教えることの困難性・重要性

修得したスキルを他に転移させて活用することの不確実さ

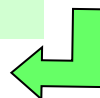


感情的知能発達のための状況依存原理

学習者の感情レベルを考慮する

* 子どもの感情状態と感情表示を制御する能力の発達

- 感情の激しさは年を追うにつれ弱くなる
- ⇒年長の子どもよりも幼い子どもの方が感情を強く感じている
- 子どもの感情状態と感情表示を制御する能力は、年齢に基づいている
- 感情制御能力を高めるために、感情を異なる状態へと動かしていくかを明示的に調べる方法がある
- 感情の自己制御の支援:感情表現が複数あること、適切に感情を表現できる方法があること

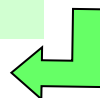


感情的知能発達のための状況依存原理

学習者の感情レベルを考慮する

* 他人の感情を制御するための子どもたちの発達的な能力

- 子どもは自分自身の感情表現や反応を制御できるようになると、他の人も感情を持っていることを理解する
- 他人の感情的反応を制御する試み
⇒ 幼い子どもが、落胆するような出来事の中で、人を元気づける等、仲間の感情状態を変化させる方策を考えだす
- ⇒ 方策は発育上異なる ex: 感情変化への働きかけ、状況への対処
- 他人の感情を認識し、反応し、影響を与える能力は発育上異なる
- 文学や物語の利用は、他人の感情に対して認識し、反応し、影響を与える能力を高めるのに役立つ



感情的知能発達のための状況依存原理

感情発達に影響を与える内的要因について考える

* 性格と感情の強さ

- 性格は子どもがどのように感情を表現するか、どの程度容易に感情が引き起こされるかに影響を与える
- Ex: 感情の激しい子ども⇒攻撃的



感情的知能発達のための状況依存原理

感情発達に影響を与える内的要因について考える

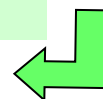
* 経験を蓄積する能力

- 経験を蓄積する能力は、感情制御に影響を与える
- Ex「このおもちゃで遊ぶのは楽しい。悲しいのはいやだから、このおもちゃで遊んでみよう。そうしたらやっぱりよい気分になった」⇒環境との相互作用の結果を蓄積する能力
- 子どもによって感情に関する経験を蓄積する能力は異なる
- 経験を蓄積する能力によって、感情的になった状況での対処能力に違いがある
- 経験を蓄積するための方策:「感情の日記」
- ⇒感情、感情処理、感情に命名、感情を楽しめたか、否定的な感情への対処方法
- ⇒未来の感情処理への活用

感情的知能発達のための状況依存原理

感情発達に影響を与える外的要因について考える

- 外的要因: 性別、文化的背景、自宅での生活、親の性格特性・感情表現方法
- 権威主義的な親は、高圧的、懲罰的な基準を用い、要求についての理由説明がなく、子どもを許容する環境もない。
- 権威主義的な親に育てられた子どもは感情行動の基準を獲得できず、感情的状況に適切に対処することが難しい
- 「感情日記」の活用



結論

- 感情的スキルと認知的スキルの教授は、まったく異なる
- 感情に関するスキルの階層構築が困難（感情の複雑さと状況性）
- ある状況で修得されたスキルを他の状況に転移させて活用することは不確実
- 感情的スキルを教えることは、自分と異なる人々との密接なコミュニケーションのためにも重要
- 情意領域に関する知識基盤の構築の必要性

